

論文審査結果の要旨

本論文については、2025年2月19日、文学部会議室で開催した博士論文公開審査会において内容説明がなされ、その後質疑応答が行われた。公開審査会で提出された主な論点は、以下のとおりである。

- ① 芸能と『説唐全伝』の関わりについて。
- ② 王伯当のキャラクターと芸能の関係について。
- ③ 物語内容の地域性と出版地の関係について。
- ④ 芸能の地域性について。
- ⑤ 『混唐後伝』・『征西演義全伝』・『隋唐演義』の関係について。
- ⑥ 避諱の実態について。
- ⑦ 歴史小説と歴史書の関係について。
- ⑧ 『隋唐演義』において削除された詩詞の解釈について。

以上の論点について、質疑を行い、基本的に適切な認識を有していることが確認された。

本論文は、中国において非常に人口に膾炙していながら本格的な研究が少なかった白話小説『説唐全伝』とその周辺の小説について、芸能の影響という視点から物語内容を再検討するとともに、本文の校勘と歴史書との比較を通して後続作品の成立過程を明らかにし、それらの結論を踏まえて『説唐全伝』の成立年代を解明するものである。

第一部における芸能と『説唐全伝』登場人物の関わりに関する議論は、時期を確定しがたい曖昧なテキストしか存在しない芸能を扱う関係上、どうしても曖昧さが残らざるをえない面はあるものの、キャラクターや地域性といった多様な側面から物語の形成過程を明らかにしたことや、特定の人物に関わる物語が伝承されていた地域や時期との関係から作品の成立した地域や時期を絞り込んでいく手法は斬新であり、一定の効果を上げているといつてよい。

第二部における後続作品についての考察は、従来様々な説があって定まらなかった『混唐後伝』・『征西演義全伝』・『隋唐演義』の関係について、精密な校勘作業と歴史書『資治通鑑』との比較によって、疑問の余地なく明快に解明することによって従来の説をすべて覆したものであり、高く評価される。

以上の考察を踏まえて、従来清の乾隆年間の成立とされてきた『説唐全伝』の成立を、百年ほどさかのぼる明末以前と結論づけることは、従来の中国文学に再考を迫る重要な指摘である。

以上のように、本論文は実証的手続により、研究史上極めて重要な意義を持つ結論を導き出したものであり、文学研究科の定める博士学位論文審査における評価基準を満たしているものと判断される。よって本委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値することを認める。